

私と超音波

廣岡芳樹

名古屋大学医学部付属病院光学医療診療部 准教授



[略歴]

氏名:廣岡芳樹

生年月日:昭和35年4月21日

所属:名古屋大学医学部附属病院 光学医療診療部、所在地:名古屋市昭和区鶴舞町65

〈最終学歴〉昭和61年 名古屋大学医学部医学科卒業

〈免許等〉医師免許 医籍登録番号 300351 昭和61年5月28日

〈学位〉名古屋大学 医学博士 平成8年7月12日 “Differential diagnosis of gallbladder masses using color Doppler ultrasonography”

〈勤務歴〉

昭和61年3月:名古屋大学医学部医学科卒業

昭和61年6月:半田市立半田病院研修医

昭和62年4月:半田市立半田病院内科医

平成 2年4月:名古屋大学第二内科医員

平成 8年4月:愛知県総合保健センター内科医師(名古屋大学医学部第二内科 非常勤講師)

平成12年2月:名古屋大学光学医療診療部 助手

平成15年9月:名古屋大学光学医療診療部 講師

平成21年7月:名古屋大学光学医療診療部 准教授 現在。

私は昭和61年に名古屋大学を卒業し、半田市立半田病院で研修を行いました。上司の先生から超音波検査を教えて頂いたのが超音波に興味を持った始めです。大学へ帰局後も主に胆道・膵臓系の超音波検査に従事しました。そこで与えられたのがQuantum QAD1と2000というものすごく大きく重い超音波観測装置でした。QAD1はリニアプローブしかなくB-mode画像は全く劣悪で、2000になってようやくコンベックスプローブが装備され、何とかB-mode画像が“普通”になりました。但し、これらの装置によるカラードブラ断層法画像は当時の国産のものとは比べ物にならないほど高フレームレートで画像観察可能で極低流速の血管内血流のFFT分析も可能でした。

この超音波観測装置を用いて胆嚢隆起性病変のカラードブラ断層法で観察し学位論文を書くことになりました。Quantum 2000になってB-mode画像は少しは良くなりましたが、CAD1と比較して良くなったということであり他のどの装置よりもB-mode画像は劣っていたかもしれません。このB-mode画像で“胆嚢を見つけ、胆嚢内の隆起性病変を観察していました。結果的にコレステロールポリープであった症例でしたが、ポリープ内に血流シグナルを見たときにはものすごく興奮したのを覚えています。10mm大のポリープでしたが癌であると信じて疑わず、上司に癌ですので手術方針をお願いします、と申し上げ、無理やり手術をして頂いた症例がコレステロールポリープだった時にはさすがに落胆しました。その後、血流シグナルが出るだけでは良悪性の鑑別診断はできないと考え、隆起内の血流速度とRI (resistance index)を測定することにしました。血流シグナルの有無をみるのは比較的簡単でしたが、FFT分析を行うとなると非常に大変でした。朝8時半から始めた検査が10時半になっても終わらず、患者さんは寝てしまい、私の腕は硬くなってブルブルと震えていました。患者さんから、“先生、大丈夫ですか?”と何度も言われ、“大丈夫です”と頬をヒクヒクさせていたのを覚えています。中には、午前中ずっと検査をやっても良い画像・データが取れず、患者さんをお願いし、午後からまた1時間2時間とエコー検査をやっていたのを覚えています(もちろん入院の患者さんですが、患者さんも私も空腹でおなかグーグーになっていました)。このようにして、胆嚢癌数十例と他の良性胆嚢隆起性病変の検査を行い、流速とRIの組み合わせで胆嚢癌の診断が可能であるとの結論に至り、無事、学位論文にすることが出来ました。

その後、色々な成り行きで、体外式超音波検査よりも超音波内視鏡検査を実施する機会が増えましたが、超音波内視鏡検査の基本はどこまで行っても超音波技術であり、新しい超音波観測装置が世に出るたびに欲しくなってしまう、つい先ごろも某メーカーのハイエンド機種を当院の“車庫”に入れることが出来たのはとても嬉しい出来事でした。今後も新車の車庫入れが出来ますよう頑張っていきたいと思っています。

とりとめのないことを書きましたが、今日まで、超音波に関する種々のことを教えて頂いた方々、また、協力して超音波検査をともにやってきた方々に心から感謝の念を表すと同時に、今後も超音波に関する“オタク”でありたいと思っています。